



日用心法鈔三編

下

9
3456
8止



口9
3456
8



日用心法 餘三編下 目錄

一金持^{かねもち}の無^む性^{じやう}ふ^くら^くい^いの事^{こと} 二丁

一金持^{かねもち}と貪^{くわん}多人^{たふた}と^とら^らふ^ふと^とバ^バ金持^{かねもち}が勝^{かち}ま^まるといふ事^{こと}

一智者^{ちやう}学生^{がくせい}でも身^みを治^{おさ}めず家^けを齊^{ととの}へどあてハ役^{やく}小^{せう}互^ごぬ夏^{なつ}

一金^{かね}根^ねのふしい者^{もの}ハ金^{かね}ずきみふとといふ事^{こと} 十丁

一金持^{かねもち}の無^む性^{じやう}ふ^くら^くい^いハ有^う賊^{ざい}餓^が鬼^きといふ事^{こと} 十三丁

一一切^{いっけつ}の災^{わざい}ハ我^{われ}身^み勝^{かち}も貪^{くわん}欲^{よく}より起^{おこ}る事^{こと} 十四丁

一我^{われ}身^み勝^{かち}も利^り欲^{よく}するふ^ふ仕^しやう^{やう}ありといふ事^{こと}

一あ^あふ^ふい^い物^{もの}をえ^えつ^つい^いう^うま^まい^い物^{もの}ハ跡^{あと}で^でといふ夏^{なつ} 廿二丁

一豆^{まめ}莢^{えい}をつま^{つま}せて見^みる^る金^{かね}をか^かせる^{せる}人^{ひと}の事^{こと} 廿三丁

いん



一金をかりる人ふ色くありかせる人ふを得ひる夏 九四丁

一ある浪人身上の法立をよくある安ふ暮せしむ 九六丁

一世の中の風俗ふうつる事あるといふ事 三十丁

一は世の苦むかりふ志て樂むふいとといふ事 三十丁

一解ついろ七五三をいふゆめく遊ぶふ 三十三丁

家業出精の徳

因ふ念佛のありがたき事を知るす 三十三丁

日用心法鈔三編 下

○一休の歌とて金持とあるうろろくいひたる飲あり

是もを得ひる極き事也金持むかりあるうろろく

いふけまた中く左様の儀ふありず金持と貧乏人と

うろぶまた金持の方がいふろろくあるがごとく

あやぐとえて考ふべし先金持とあるうろろく

○金持と朝晩すける灰吹いたまるやど猶きこふいと志ま

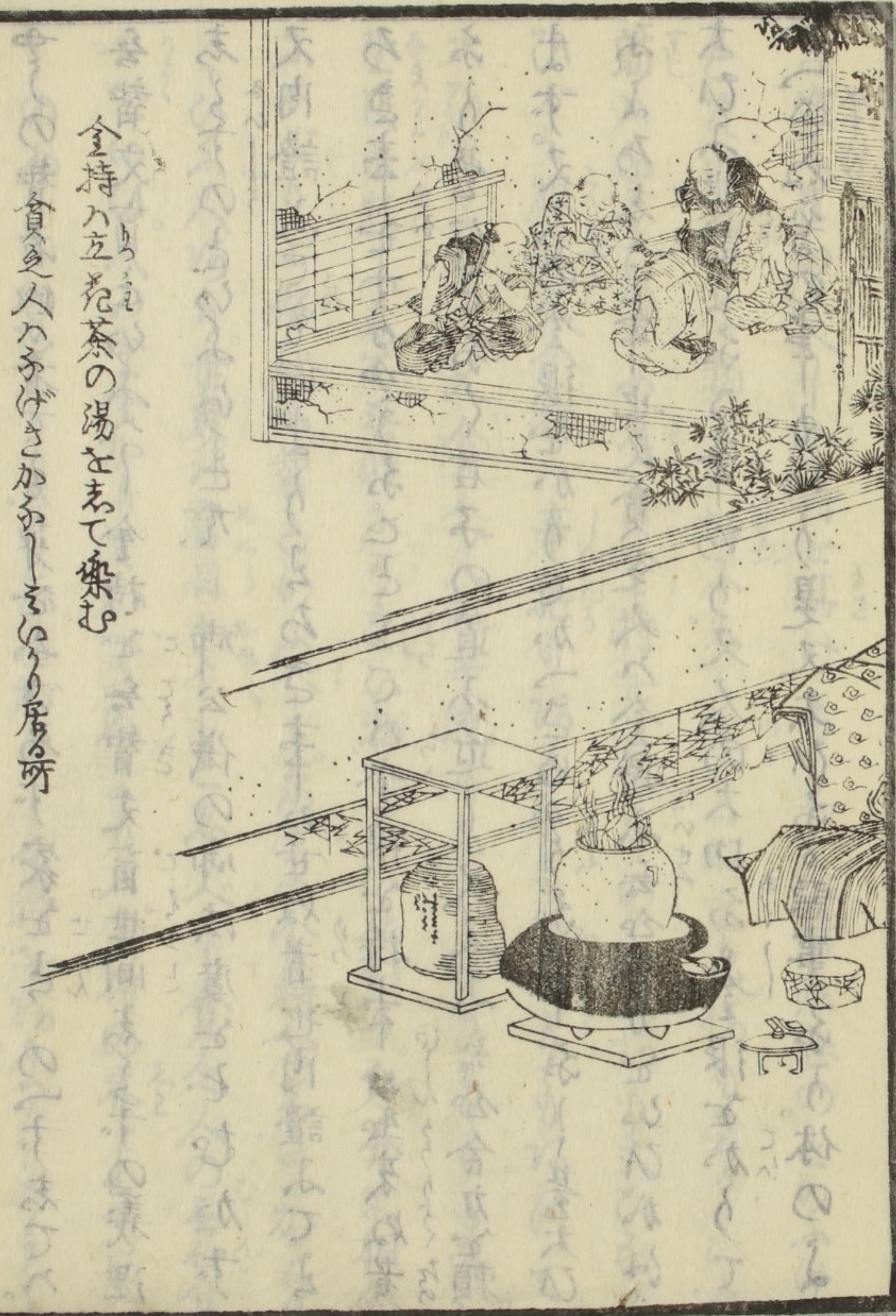
欲ふかき人のとふる雪へつもるふつけて道とらす

○金と持人の他法をよくきけバ只いきおがら無慈悲かき道

○何の世の世間あるの義理あるあさけあるが金持ふる

○金持と十人よせてよく見まへ。中ちゅう五五人むごにんの無学むがく文盲ぶんもうかやうふ秋あきいらうも何なんりて。家いへふかきそつくがごとごと。金持きんもちとを学まな文盲ぶんもうけあらずといふけきた。又金持きんもちぬ貧乏人ふさびたふ。猶更なほさらに学まな文盲ぶんもうけあらずの。そ悲かなかき道みち不義理ふぎりの人ひと多おほく。先まづ身み一ひと悲かなふさけがあつても。ふ袖そでふふふとず飢う糧りやう等らうふつき。救すく米まいすすい金かねがだ出でした。くても出だす事ことふふりかごとごと。有あ福ふくの人ひとふまう世よふ悲かなふさけをする。は一言ひとことを以て金持と貧乏人との高かう下げとある。金持きんもちハ十人ふ七八人まといざハ。後あと義ぎもそふり。学まな文ぶんも道理道理もふ得えたる人ひと多おほく。又人ひと柄がらもよく。立た花はなもあうきく。

茶の湯ちやのゆ等らうもふ得えたる人ひと多おほく。貧乏人ふさびたハ家いへ賃ちやんの物等ものらうふとて。学まな文ぶんも禮義れぎも。立た花はなも茶の湯ちやのゆも。出で米まいかごとごと。致いたしたくても肝かん心しんの金限きんげんがふきあふ出で米まいぬ也。是等こゝろの道理道理を以て。金持と貧乏人との高かう下げとある。又金持きんもちハ学まな文ぶん盲もうても何なんりけきた。身みを脩あそめ家いへを齊ととのへる。ふ於てハ大智者おほいさかふるべし。何なん所ところそふい所ところがふくてハ金限きんげん持もちとぬ者也。所詮しよせん身みをよくかこめ家業けごうを出で精しやうし。儉けん約やく質素しやくそとちり。祇ただハ金持きんもちふふりかごとごと。ふりハ自然しぜんと君子くんしの道みちふけふ。身みをよくかこめ家いへを齊ととのへる。ハ世よ界かい第一だいいちの入用いりようふりけ上うへとこす。智ち恵えふりけ上うへとこす。藝ぎ子し。何



金持ハ立花茶の湯を煮て樂む

貧乏人のあけさかあーといふ居る所

中の智者學者ても。身をおさめず家とくの一ずあてに。
吾智文盲といふべし。金持を吾智文盲。世間あらずの義理
あるすのといふゆゑに。 卿公儀の卿法度をとむかす。
又内證ふてもあまよりよろき事ハせぬ者也。内證ふてよ
ろき事をす。中ふことふてハ金銀を持事ハ世來ぬ者
ふり。是何となく君子の道ふ近し。又人ふ吾を合力を頼
まず。又人の金銀をかりてかつさぬ中ふ事ふし。是大ひ
ふよりあき事也。又貪乏人の金持ふ吾を合力をいひかけ
大ひふ世話ふる事あり。又人の大切ある金銀をかりて
かつさぬ等の事もあり。是又大ひある惡事ふり。体のよ

き盗人なりふべし。金持を賤けあらずの。無慈悲のといふけ
とた唯已まが物と大切ふあて。まよぬ近也。何もうるくふ
筋ありふし。あるふ角金持をうるくふ人あり。大ひある
ひが根性也。金持の辛抱あり。まよきあふりあり。て
大ひふより。又貪乏人の辛抱もふくまよきあふりあり。
世に不精ふあて。吾性ふるまよ物なくいたがり。身か不相應
ふふごりて好む不智といふべし。あるふ金持をうるか
くふ人あり。世間の盲目多しとあふべし。貪乏人の吾を合
力をいひ。人の金をかりてかつさぬより人。金持の者きこあ
し。のやうかいふよりまよきあふべし。金持をうるよりまよ

人の人々をききたる一の人をかりと見て賢人君子の事
 をあらぬ。清智恵の人已に勝る。いけを是非
 善悪をきつてきて。吾性ふとある。大愚無智といふ。一
 なる。詩よ作り。歌ふんて。うらうら。又其上の大愚あり
 善悪損益を考て。何まり。うらうら。いふべからず
 今更ふ論ず。所へ生皮不精ふ。身分不相應のふ
 ごとく。吾性ふ。うらうら。いふべからず。貪をす。
 人の事也。又隨分と儉約志。いふ。うらうら。前世の因縁
 ふ。よつて。小猿小身上。よて。子供役。多者。多く。あて。かせ
 ぐ。ふ。い。つ。ふ。る。人。論。の外。あり

又何ぞと智者。学生でも。身を治めず。家を齊へず。てい。
 是又無学無智。同前也。学文の何の爲ふ。や。身を治め。家
 を齊へんが爲也。ある。身。あ。さ。め。ず。家。も。齊。へ。ど。あ。て。金
 持。が。金。を。か。せ。ず。よ。こ。こ。ぬ。と。て。腹。を。立。る。く。い。ふ。大。ひ。あ。る
 悪人あり。い。い。金。を。か。す。べき。や。い。い。金。を。か。す。べき。や。あ
 ても身の爲ふ。家の爲ふ。あ。う。ず。あ。て。役。も。立。ぬ。事。ふ
 を。ひ。あ。く。す。る。あり。金持の目。か。う。え。ま。を。大。だ。い。け。の。仕。方。也。
 吾智文盲の造。と。が。こ。い。又。かりた。と。て。か。せ。う。ら。う。り。の。ふ。あ
 ら。ず。か。せ。る。と。か。い。と。事。を。あ。う。ず。金。を。か。り。る。と。富。で。も。あ。ら。う
 ず。ふ。思。ひ。あ。ふ。ど。り。て。あ。く。す。る。後。ふ。か。り。た。う。け。の。罪。が

日月八日金三ノ月

六

重くおめて^{おも}疎く^{ゆる}貪^{あま}するあり。金持^{かねもち}やどの男^{おとこ}あまを^とと
 らの事^{こと}をよく含^ふ意^い志^し志^して。慈悲^{あいつ}心^{こころ}でかせぬあり。あると世^よ
 間^{かん}あらずの情^{なさけ}あらずのといふ大^{おほ}ひふた^{ふた}るぬ事^{こと}也。
 又^{また}篤^{とく}実^{じつ}の学者^{がくしや}あらず。身^みをよく治^しめ家^けを齊^いへ万^{ばん}民^{みん}を善^{ぜん}道^{どう}
 ふ引^ひへ。天下^{てんか}を泰^{たい}平^{へい}ふせんと願^{ねが}ふの^の世^よふ^ふなりがたさ
 人^{ひと}といふべ。あるふ小学^{こがく}文^{ぶん}でもありあらず。身^み持^も放^{はな}埒^{らち}ふ志^し
 て。家^けの中^{うち}ふ^ふは^は次^{つぎ}才^{さい}借^か金^{きん}へ^へ出^でやど^どの^の行^{ゆき}て。妻^{さい}子^しけん^{けん}ぞく^{ぞく}あ
 る^るさせ^せ一家^{いっか}一^{いつ}門^{もん}へ^へ不^ふ義^ぎ理^りを^をか^かり^りを^を志^して。い^いひ^ひた^たい^い事^{こと}を^をい^い
 ち^ちう^うー^う。中^{ちゆう}く^く以^いて^てお^おそ^そろ^ろ志^して^てより^{より}の^のき^きが^がさ^さー^うの^の有^{つぎ}馬^ばの^のい
 け^いな^なあり。あ^あま^まの^のい^いふ^ふ小^こ学^{がく}文^{ぶん}で^である^るあ^あふ^ふ人^{ひと}の^の笑^{わら}え^えも^もさ^さる^るが。

人^{ひと}の^の中^{うち}ふ^ふ立^たち^ちを^をあ^あら^らて^てこ^こま^まり^り者^{もの}也^{なり}。歌^{うた}ふ
 能^{のう}ありて。お^おお^おろ^ろじ^じ人^{ひと}より^{より}も^も無^なく^く無^なく^くある^る人^{ひと}ど^どう^うと^とき
 物^{もの}あ^あり^りの^のを^をあ^あら^らず^ずる^るを^をこ^こと^と愚^ぐ智^ちの^のを^をあ^あら^らず^ずる^るを^をこ^こと^とする^る
 論^{ろん}語^ごふ^ふの^の論^{ろん}語^ごあ^あら^らず^ずの^のい^いふ^ふも^もあ^あら^らず^ず。無^な智^ちを^を学^{がく}ぶ^ぶ人^{ひと}ふ^ふ笑^{わら}へ^へと
 是^{こゝろ}等^らの^の秋^{あき}を^をえ^えて^ても^も悲^{かな}む^むべ^べ。恥^{はぢ}入^い道^{どう}。ろ^ろん^んど^どよ^よの^のろ^ろん^んど^ど
 あ^あら^らず^ずの^の是^ぜ非^ひも^もあ^あら^らず^ず。何^{なん}も^も知^しら^らぬ^ぬ人^{ひと}。こ^こら^らく^くい^いふ^ふこと^{こと}を^を
 ら^らら^らと^とて^て。ろ^ろん^んど^どの^の学^{がく}文^{ぶん}を^をけ^けが^がす^す惡^{あく}人^{にん}あり。儒^{にう}道^{どう}の^の罪^{ざい}人^{にん}也^{なり}。
 終^{はつ}く^く考^{かう}つて^て。ろ^ろん^んど^どよ^よの^のろ^ろん^んど^どあ^あり^りふ^ふあり^りふ^ふ。学^{がく}者^{しや}の^の身^み
 持^も放^{はな}埒^{らち}ふ志^して。家^けを^をあ^あら^らず^ず。人^{ひと}ろ^ろん^んど^どい^いふ^ふ。無^な学^{がく}文^{ぶん}盲^{めう}でも^も。金^{かね}持^{もち}て
 家^けを^をあ^あら^らず^ず。人^{ひと}の^の大^{おほ}ひ^ひふ^ふろ^ろん^んど^ど。人^{ひと}の^の物^{もの}を^を無^な理^りふ^ふろ^ろん^んど^どが^がら^らず

日月の金三層

唯己^{おの}とが寶^{たから}を大切^{たいせつ}ふ志^{こころ}てちり居^いるむかり也。人^{ひと}換^かふ損^{そん}を
かける氣^きをひふ^{きづ}。大^{おほ}ひふよろ^{よろ}。又^{また}無^む理^りを志^{こころ}てハ全^{ぜん}恨^{こん}
ハ持^もとぬ也。無^む理^りとると座^ざふ人^{ひと}がら^ら何^{なに}てか^かり。彼^{かれ}是^{こゝろ}と法^{はふ}
立^{たて}を志^{こころ}て。取^とふか^かける。少^{すこ}し金^{かね}恨^{こん}が^が何^{なに}と。座^ざふ山^{さん}司^しが^が何^{なに}て。
うまの事^{こと}をい^いひてたま^{たま}す事^{こと}何^{なに}り。無^む理^りが^がふけ^{ふけ}とむ。山^{さん}
士^しでも何^{なに}でも取^とふか^かける事^{こと}ハ坐^ざ来^{らい}が^がこ^こ。是^{こゝろ}ふよ何^{なに}て全^{ぜん}
持^もハ少^{すこ}しも無^む理^りハ坐^ざ来^{らい}が^がこ^こ。無^む理^りを志^{こころ}ても其^{その}まうふ哭^{なみだ}ひの
来^きらぬハ武^ぶ家^け方^{かた}ふり。町^{まち}人^{ひと}百^{ひゃく}姓^{せい}の全^{ぜん}持^もハ少^{すこ}しでも無^む理^りす
ると。座^ざふ人^{ひと}が咎^{とが}めて^{めて}何^{なに}とぬふり。彼^{かれ}是^{こゝろ}とい^い何^{なに}て。全^{ぜん}恨^{こん}を
取^とつり^りをする。是^{こゝろ}ふよ何^{なに}てか^かりふも仁^に義^ぎ禮^{れい}の道^{みち}とふも孤^こ

をあらずぬ。とよ。君子の仲間中ふり。又貪乏人ハ。生皮ふ
 表て。まきこふりんをかりふ。終ふ人ふ損とうけ難儀
 をかけ也。又金持ハたとひ略しきこふ。の人ふりとも
 人ふ損をかける氣をひふ。貪乏人よりハ大きふより
 一金限を揃ふるやどの人ハ。身とよく儲け家業を結
 表て。儉約をもちまきこふり。何れで。未の事返ふよ
 くかんづて。其上氣長ふ辛抱を志て。功をつて金持と
 ありふり。貪乏人ハ身一身をさめず。家業不精ふ表て
 まきこふりんをかりふ。鼻の先の樂を志て。悲ふくる志
 るの事とあらず。愚鈍不智のけ上ふ。金限をり。

がまた一朱も持事ふりがこゝ生皮不氣根ふゝて。
 家と中ぶる人ふり。世東の用ふ立ぬ人也。萬民の上ふ於て
 役義入つとめさせらるぬ人ふり。我身たも脩むること
 何と云ふ。況んや人を治る事何と云ふや。又たとひ金根ハ
 持たせめて借金とせぬやうふ致さべー。たとひ又一旦ハ
 かりるた。身とららー辛抱志て早速之をべー。又不時の
 入用金も退くふ持するやうふ致さべー。金根ハ身をお養ふ
 ふくてハ時とぬ者也。後依不後依たふ真先ふ人物ふり。
 ふるふ其用意もふく志てつるすハ至て何やうー不覺ふ
 方ふり。世の中ハ公やむせふもすまなげさふくしてハ。

らまゝもせず。け致えふも出さる。皆人のよくありたる。奇
 ふり。ふるふ其をさよく合意せざるハ。見ずあつたの人と
 同ト。せさふくしてハ。さうさもせずといふとてハ。身よ志
 してあつた。ゆゑなる事也。ふるふ志かともあらずふくす
 ハ。吾智の甚あき也。何卒け歌の心をよく志して金根と沢山
 ふ持へーまたせさふくても渡さるふるふは渡りふさ
 是跡ハいふぬ。ふくてさうさるふるふは合カふふ及ばず。
 借金とるふ及をす無理を志てやうがふふ及をす。盗賊か
 たりするふ及をす。かせぐふ及をぬけひらけを煮たりたり
 是ハ合意の初やうふ根とやめて。卑たー

金限を持ふ。第一先身をよく治め。酒宴狂喜甚外道
 あらぬ事。少くもとべうず。唯家業を正精。儉約質
 素をもち。金限の正道をこゝらねず。小致をべ。無理
 を志て急ぐ。ためんとせず。唯順道の地道を以て。少く宛たぬ
 んと思ふべ。道あらぬ事を志て。大げさためんと思ふ
 人。大ひある。ゆきありあり。山事のゆき。たるためし。
 無理志て。いとい。誤入更ふ。山事を改。無理志て
 位あり。仏神聖人の教。へ間遠ひとある。中々た候のこ
 とあり。何でも佛神聖人の教。へ隨が。不んを。福德安
 ぬ。若其外ふ。よき道ありと思ふ人。仏神聖人の教

つの。よき事をあらぬ人あり。正道正理のえぬ人あり。安
 ちて変るべ。未ふ。大あんぎをする人。唯け。方。禮義
 正。く。信。深く家業大事。身。を。ち。べ。福德も安。ゆ
 其。中。より。ある。家業不。精。身。持。より。志。て。貧乏
 ん。ぎ。する。人。已。む。が。ち。あり。又。人。候。損。を。かけ。かり。た
 物。さ。う。さ。ぬ。杯。大。惡。無。道。と。い。ふ。べ。身。を。治。めて。金。持。人。を
 へ。何。や。どの。惡。人。と。志。が。こ。貧。乏。人。と。金。持。を。ち。く。い。ふ
 人。大。ひ。と。あ。う。ぬ。事。多。う。た。い。ふ。べ。可。ふ
 貧。の。せ。思。ひ。人。と。志。つ。不。沙。汰。の。と。や。か。げ。ど。と。を。い。ふ
 貧。の。せ。徳。ある。家。と。不。豆。た。て。小。家。より。志。て。人。と。を。い。ふ

と貪乏人の金持をとりける。二首の哥ありける。人々能く考て。貪乏人の方ふ無学文盲也。無理もひがらむ。多くありとあるべし。是れ金持をひきあてかくるふあつた。金を持ちふふと人。自然と無理もいふ。不義理もせぬ。ふふふとある。何卒金持ふふりあつと人本也。

○又金根のやいと思ふ人。金好ふあるべし。我共ふいよく。ある國の法家中。知る八十石取人あり。い人大金持ふり。又を安く出入る町人あり。甚だううやあき思ひて申。けるやういあふさる。つむ甚やう。金根の沢山。出来ん哉。と向ひをむ。士ひ申さる。ける。我等。え来金根。おき

ふ。たまり申。といつて町人のいよく。誰か金のきういある者。一人も座ふ。中ふも私探。至て大好ふ。命ふか。つて。やう。思ひた。めんとする。中。たまり。不申。といつて。侍ひのいよく。いやく。其件。方。金好。といふ。けをた。ま。い。う。と。九。そ。け。城。中。ふ。獨。り。も。か。孫。ず。き。う。し。き。人。一。人。も。不。請。不。申。お。其。え。杯。の。好。と。嫌。ひ。との。沢。と。一向。存。知。ふ。さ。と。い。つ。と。り。其。沢。を。か。と。り。申。さん。先。其。許。方。ハ。道。具。好。ふ。り。色。く。ふ。物。を。や。う。が。る。や。う。が。さ。ば。う。ら。孫。を。あ。ら。ぬ。か。つ。金。根。が。へ。る。ふ。り。け。つ。よ。て。か。孫。の。き。う。い。とい。ふ。沢。と。ある。べし。又。我。等。か。孫。む。き。と。申。す。ハ。何。も。や。う。が。る。ず。

かたぬ也。若くは不潔にぞなりき物ある時ハ。いやく金限ふま
るる寶ふ。と思ひて買事をやめふするあり。家が倦り
た。くても道具がやしくても。か孫が戚ある。皆やめて金
て持て居るあり。か孫よて持て居るを損ふふくて。徳をか
りさる。人よりりみか。ちうふあてらるるあり。か孫を持て
いさる。金が子せうんで。段くとふへるあり。まはる道具衣類
がやしくてもか。あらずふ。金よて持て居る。是偏ふ金好の由
あり。外の入くハ。よい物物がある。ことをか。よい道具が
ある。ことを買。見る物。用物をや。がけ。て求る。是か孫さ
み。あ。む。あて衣類道具さき也。金限したま。うぬ。答ふ。我

等ハか孫さき。あ。何。が。や。しくてもか。あ。ぬ。ふ。り。又。米。ハ。且
那。より。黄。へ。沢。山。あり。是も。儉。約。あて。き。ふ。あ。る。年。く。あ
まる。ふ。り。又。序。米。の。飯。よ。そ。あ。る。を。吸。へ。む。身。の。盡。ひ。たり
ぬ。べ。衣服。も。外。を。つ。と。む。る。時。ハ。且。那。の。外。用。ふ。を。一。通。り。の
持。置。て。是。を。用。ひ。大。事。み。か。る。あ。る。一。通。り。み。て。め。め。た。ふ。と
る。く。あ。る。事。あ。る。常。ふ。ハ。え。く。る。通。り。身。ふ。より。と。る。さ
衣。物。よ。て。く。る。す。也。是。み。て。寒。暑。を。あ。の。く。み。たり。ぬ。若。榮。曜
か。起。り。よ。い。衣。類。を。買。へ。む。先。き。一。す。き。ふ。金。限。が。へ。る。あ。ふ。と
ぬ。ふ。り。あ。る。も。あ。る。ふ。け。き。バ。く。く。も。不。自。由。ふ。思。ふ。と
ぬ。ふ。り。又。是。も。か。孫。さき。あ。る。女。房。下。男。下。女。よ。至。る。迄。も。皆

か孫ずきふり。か孫のきういふ者ハ我氣いしぬを抱へ
置事あり。夫れ下男下女追も皆か孫ずき也。是ふい
て汚飯をかりくらせておく。女も不豆のふくは飯を
くらふのも。いづこも思はず。ありかしく思ひてたべるを。冥加
もいづこも又道具も沢山ふふけきた。不自由なる事もあり。彼
等もか孫ずきなり。いづくの切米もいづのをして。年々金根を
ふやす也。龜角すきこつすき。金根はたまる物ふりとかと
らまけきた。右の町人口を嚙きて。かひりけり。とありは侍ひ
のいづこもいづこもか孫ずきふり。いづこも損入ふき者ふり。
又金根のなる所ハ金根がよりなる者也。金根はつきのなる所ハ

能ふる物也。金根は沢山いづ方へ来るものあり。けんず
る所ある所ハつまる者也。何卒か孫むきふりつて。
多くあつめぬ。
○又金持ふも息引息ふ。人の實をやりが。者あり。至
ていづこもいづこも金根の威光を以て。貧窮人ののどを
とめる者あり。是等ハ鬼だ蛇だいひずのふい悪人
也。是と有賤がきといふ。金持の貧乏人也。哥ふ
○金持が有かういふも。浅金をふやしたがる。貧人といふ
正座ふ食ふとせと。とせと。欲をふき。福人といふ
とありは二首の歌ふてよくあるべし。金根がふきとて。一

がいふ貪者といふ定めがごとし。貪者よ且事を志すべし。福人あり。福人よ且事を志すべし。貪人あり。是よりいひて
 ありが上ふも。吾等よりいひて。貪人と名付。又人の物をい
 まりや。いづこの道ふも。欲知且よ志す。中道の初ひ有たし。
 中山觀音夢物語ふいづ。金根をこしらへて何の爲ふ
 するや。第一親孝を志す。不自由ふく。仕へんがためふり。
 又御先祖連の追善佛事をいとふ。披苦興樂增長菩提
 を祈らんが爲也。又我身の用を達し。妻子けんどくを養
 ふらんが爲ふり。又金根の余半もいづ。身をお慈の施

しもはしたき鳥也。唯金根を握りてをくめて。ためるをかり
 を面白がりて。無性ふ欲をかき。たうらの番人よ志す。上
 らをためる。儒人の是を守。浅奴といふ。是のまこと
 何事なりや。めくる事ふいづ。何卒親族朋友の難ふは
 事あり。バカの及ぶたけ。助けたき者也。古歌ふ
 金根の慈悲と利益と義理と耻身の一代ふ。つうふべきふり
 平生に我身の上を始末せよ。人の爲ふは物をか。ひふ
 益もふく。きふ金む義理せよ。まごかの時のい。まごき也
 是等の文段をよ。志すべし。人の人爲道を通るべし
 思ふても。猶思ふ。我公名。利欲色と惡友何ん

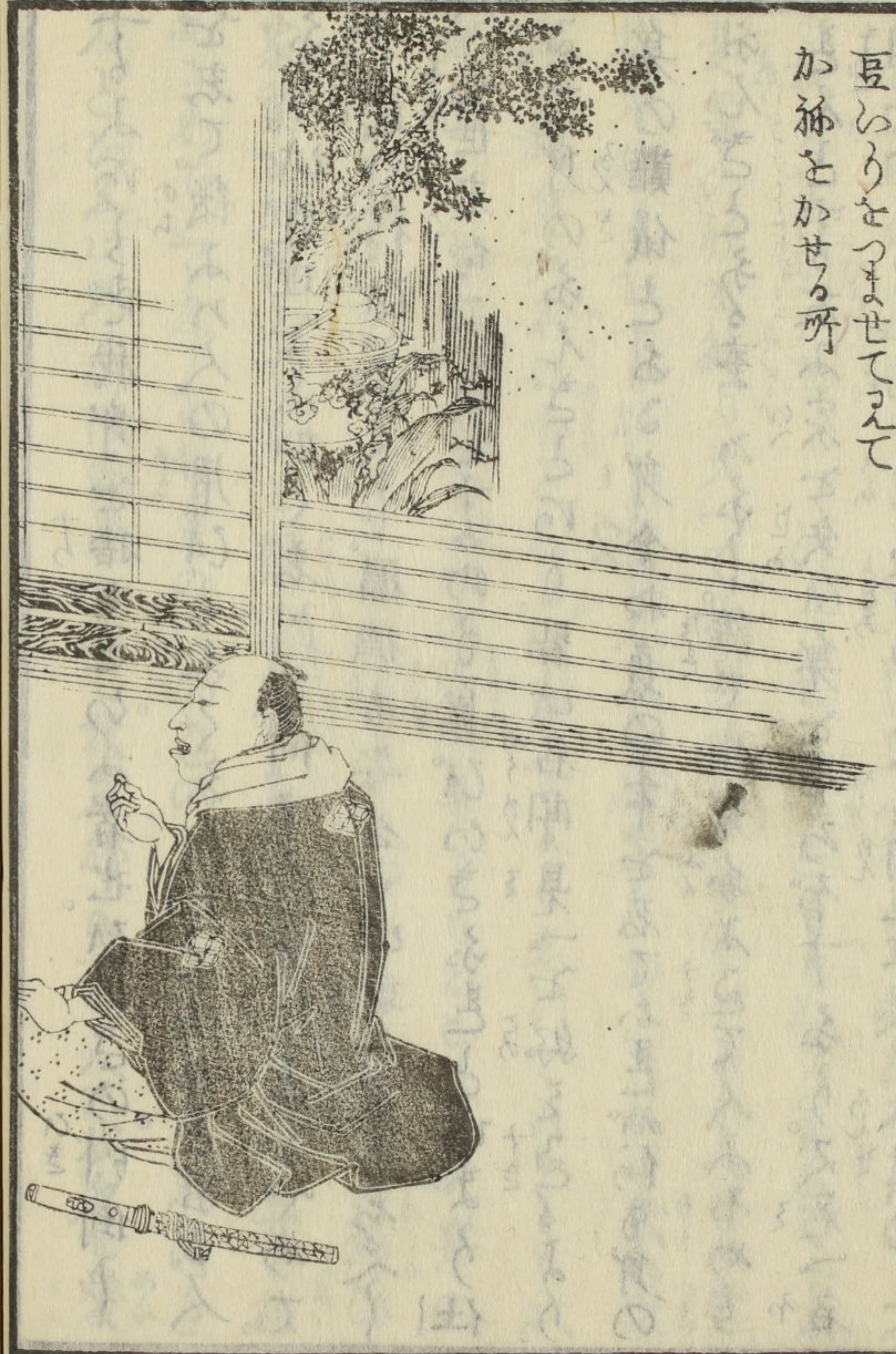
とも何と名聞利欲色と惡友家業不精とをこり不身持
 我身勝もとの急度ふきやうふとべ。け八つが所
 詮安ふ世を送りか。哭ひふいろくあまた其本ハ
 け八つ也其内ふも名聞色欲我身勝もより一切の哭ひハ
 こるとあるべ。中ふも我身勝も哭ひやどおそろき
 者ハふ。け我身勝もこつ取てのけをけ世歎ハ安ふ也。
 世歎中の人と中ふ也。け我身勝も身びいきこつ世
 ハ貪欲瞋恚愚痴も自然とふくふけて身も安穩
 ふり世の中ハ大ひふく。け我身勝も身びいき
 せふもせぬやふすべ。所詮我身勝もふけりて人

候中惡鋪ふり。我身の苦勞も多くあて安ふ。大
 哭ひとあふべ。又人のふんぎをせふも思ふ。我身勝
 もむかりする人ハ主をも親をもころせやふ事候。者
 也。変て油彩すべ。世ハ我身勝もする人やどふを
 ろ。さりのハふ。人をもそこふいふともやろぶる人
 ふり哥ふ
 ○身を思ふ人。人をけりふよせつひふ。親も殺すの也
 ○人ハ勝力ハあまた。我身勝もふ。智恵ハふい
 ○身びいきをする人。中ふ。身びいきせ候。人と中は
 ○身を思ふ人。人をけりふよせつひふ。親も殺すの也

○世の中の人のかき外ふ所。男は我身は我かたきふり
○我身を引きたる。ひいきの仕様なり。仁義禮智信を引ひ
是等の秋を結く考つて。我身勝ゆを成し。もすべし。も
我身勝ゆとする。からあて。人ふも惜まふ。かき。も求む。後
ふ。我身の不仕合とある。は。事。を。よく。あて。成し。も。我
身勝ゆを。と。べし。つ。切の。哭ひ。き。より。なる。又。我身の
ひいきする。あり。ひいきの。仕様。なり。仁義禮智信を。引ひ
家業を。出。精。あて。家を。齊。一家。来。眷。属。を。よく。養ひ。身を。結
か。こ。めて。く。く。す。を。我身の。ひいきの。あ。や。う。を。よく。あて。と
人。と。り。ふ。け。外。無。理。非。道。を。以。て。我身勝ゆ。する。人。は。我身を。愛

する。ふ。け。も。我身を。捨。ると。り。ふ。者。也。ひいきの。引。倒。し
と。あ。て。後。ふ。人。の。用。ひ。も。ふ。く。ふ。け。で。不。仕。合。と。ある。人
ふ。り。は。道。理。を。ふ。か。く。あ。て。何。卒。我身勝ゆ。を。や。め。て。
中。道。の。引。ひ。を。す。べし。福。徳。も。安。か。も。け。道。ふ。有。と。ある。べし
○出世。文。向。ふ。を。する。の。も。身。び。い。き。ふ。と。ど。り。より。仕
る。て。身。の。ふ。ん。ぎ。と。り。皆。は。名。聞。見。つ。を。好。む。る。より。
身。の。難。儀。と。ある。身。分。お。負。の。事。を。あ。て。ふ。ま。ば。何。も。身。の
ふ。ん。ぎ。と。ある。事。ふ。ふ。誰。で。も。身。を。ふ。る。て。人。ふ。や。め。ら
と。ん。と。する。お。み。家。を。失。ひ。身。を。や。め。す。ふ。り。又。え。一。名
聞。を。する。ふ。道。し。時。ふ。所。の。え。一。名。聞。を。す。べし。本。真。の。え。一

豆いりをつませてきて
かゆをかせる所



人ふはやまりをいかにで。うさねばあうねとあるべ
し。ことふより。て実ふ人ふやめらる。たかく。身をも
ふさめ。家をよく。齊つて。暮る。暮る。を。すべし。
身緒の事。よ。付て。人の世話。ふ。あう。ぬ。や。す。べし。走
ふて。其身の。一人。役。を。む。事。也。又。餘。力。の。付。て。人の世
話を。せ。む。走。程。よ。き。事。の。ふ。き。と。ある。べし。身上の事。ふ。付
て。人の世話。よ。あう。ず。ふ。う。す。人。の。誠。の。名。聞。や。ま。と
と。い。ふ。是。を。代。身。の。愛。あ。や。う。を。あ。う。と。い。ふ。人。と。い。ふ。人。
け。道理。を。よく。あ。う。む。

昔より。身とよく。治め。家業。を。出。務。あて。金。根。を。持

者。一切。の人。ふ。や。め。う。と。自由。自在。を得て。人。の上。と。ある。
人。也。皆。く。け。道理。を。よく。あ。う。て。金。根。を。沢。山。ふ。持。て。一。家
二。門。の。頭。と。ある。べし。是。も。い。う。づ。る。世。話。ふ。き。と。も。か。る。
泰。平。の。御。代。ふ。生。ま。て。悦。び。よ。ろ。こ。んで。う。さ。む。べき。と。苦。あ。る。
よ。世。が。う。る。人。機。が。う。る。金。つ。ま。り。で。う。さ。む。と。い。ふ。
か。う。あ。て。中。く。方。換。の。後。ふ。う。ず。と。い。ふ。事。也。世。の中。の
人。機。も。悪。い。唯。人。が。身。分。不。相。應。ふ。か。る。本。の。事。あり。
外。ふ。子。細。ふ。し。世。も。人。氣。も。う。ろ。く。ふ。し。今。でも。滅。速。る
人。の。沢。山。ふ。あり。唯。奢。り。の。一。事。の。若。が。貪。ふ。ふ。ん。ぎ。と。い。ふ
あり。何。卒。奢。り。の。一。事。ふ。き。や。う。よ。す。べし。け。一。事。と。い。ふ

けきを安むの世の中也。亦も世も人氣もさるるい
入るも前くの仕方のさるいといふ事をよくあるべし
何でも身をよく治め。家業を大事に儉約あてらるるや
世の中のこんきうするに上下たふさぐる衣の事也。さるる
世孫を安むの世の中也。昔に軍がらつて一日も安む
たまに窮乏する者も。惡黨たが来て座を持たるる。盗人も
かとりもせんぎする人あり。上下乱れてつる合の世の中
あり。つよい者がかちふて。毎日のけんろく論あり。或は凶
徒ふもを座する。死する者多し。或は財の出来ぬ時
ふもを士農工商たふ大難波の世の中也。夫も短い事あり

保元平治より慶長九和迄四百余年の間也。天下の合
戦のちもことあつて四民一日も安堵の思ひなしある
聖神の御武徳に依て。天下泰平の御代とあり。四民
鼓腹たへるこゝと。衣て衣裳を着かざり。花見桜山の日を暮
し。何所もふんの思もあらず。自由自在に飛びわたり
たり。何りがさき世の中也。狂歌のうまい物。くらゐて榮花み
ひまがある。戸づね御代といふは。時と口号しもある。遠
ふ。今の世の中。何一つとあて悪鋪事あり。神武以来
かきふよく治りたる世の中あり。津く浦く近も。或は
の浪風もあらず。泰平にあて。戸づね御代といふは。この時也

のうをうたけ そみ 濃明竹が鼻佐吉佛の歌ふ。のりがとや。かる時 トセウ 来て何不 あふふ 豈ふき御代 ミヨ 了すむ哉と。ふまきしもむ子万
ふり。誠は十分も大分もよい世の中也。唯おごりのつが流
れする衣入。こえきうの世の中とえつるあり。何卒 ナニゾ けつおき
やうふり うみ したし。おごり おごり かつい い むうり ふ ありうす。天地神
明の贈 く を受て う えより え あり。所の福德 ふく徳 も来 き らず。彼 かれ 是 こ 以
て ゆ 益 えき 困窮 こんきやう するふり。余 よ 人 ひと の老 らう も と 自身 みづかみ 一人 ひとり の老
あて え なるべう え ず。君子 くんし の其 その 櫛 し を し 咄 ふ む ふ とい い む。余 よ 人 ひと しか しか 己
ずと。おごりの一事 ひとこと の急度 きふど ふきやう やう 了 し べし。身 み 分 ぶん る る 三 さん ふ
つ引 ひ たりて ひ らす す べし。こふ こ 一引 ひとひ たり たり 福 ふく 大晦日 おほみそひ の勅定 ちくじやう が が

とぬ。勅定 ちくじやう が が 福 ふく を を 不覺 ふかく を を 取 と 事 こと 疑 ぎ ひ ひ あり。いつ いつ 千年 せんねん
あり あり して。勅定 ちくじやう の の 合 あ け け あり あり 十 じふ 年 ねん あり あり きて きて 勅定 ちくじやう 一
何 な にも に 他 た 者 もの あり あり ぬ ぬ 世 よ 話 わ 役 やく 分 ぶん を を 道 みち まで まで 大 たい 脱 だつ け
○又 また 身 み 介 け 不 ふ 相 さう 應 おう あり あり 衣 い 食 しょく 住 じやう を を 好 この む む 者 もの 天 てん の の 冥 めい 加 か あり あり ぞ
て て 我 われ にお に こ こ の の 仲 なつ 間 かん と と あり あり 人 ひと あり あり 又 また 天 てん の の 冥 めい 加 か を を 志 し けり り て て お
ぐ ぐ ぬ ぬ 人 ひと の の 段 だん 追 お へ へ 福 ふく 徳 とく の の 来 き る る 人 ひと 也 なり 又 また 衣 い 着 ちやく あり あり 着 ちやく 物 ぶつ と
る る 衣 い 着 ちやく 物 ぶつ と と あり あり 時 とき へ へ 先 さき なる なる 衣 い 服 ふく を を 先 さき 着 ちやく て て 衣 い 類 るい を
何 なに と と あり あり 又 また う う ま ま い い 物 もの と と あり あり ち ち なる なる 物 もの と と あり あり 時 とき へ へ ち
ふ ふ い い 物 もの を を 先 さき へ へ た た べ べ て て う う ま ま い い 物 もの を を 師 し へ へ 残 のこ す す 人 ひと 年 とし 奇 き や や と
福 ふく 徳 とく の の 十 じふ 分 ぶん 来 き る る 人 ひと 也 なり 是 こゝろ を を 冥 めい 加 か を を 志 し けり り とい い 人 ひと と と あり あり

是福德を增長する人也。若又よい衣服を先へ着たり。うまい物を先へたべる人。天の冥加みまゐて未だの貪乞ふんぎする人あり。何卒身ふよりよろい衣服を着を脱び何ぢふい物をたべるを脱ぶ人がなり。き者也。け事ハ天職。天物との書み見へころ。け道理ある事をよく表わて急度儉約をいへす。〆

○尾刈知多郡大野といふ所ハ彌兵衛といふ金かせあり。け人誰ぞ金をかりふ来ると先豆いりをつませて見て。金をかせるふり。け人ふの金をかせても。よからふと思ふ人あり。ハ先茶をいれ茶菓子よとて豆羹を出て色くおそふを

あふが。も前ふもたべかりふ来る人ふも。たべさせて。横子をるふあり。甚豆いりを小粒ふ豆より。段くと大粒ふ豆をひろい人ふ。金をかせ。又大粒ふ豆より。段くと小粒ふ豆を。人ふ。金をかせずふこところをいふあり。是ハおぜふも小粒ふ豆より段くと大粒ふ豆を。人ふ。先何ぢふい物を先へたべて。うまい物を後ふたべるといふ。姑末のよい。天の冥加をわける人あり。け人かりたる恩をわけて。をふりけて金子をかす人あり。又大粒ふ豆より。ひろい。跡みて。小粒ふ豆をたべる人。天の冥加をきく。先うまい物かり先へたべるといふ。おどり着

也。大切たいせつふ金きん根こんをかりあがう。其大恩たいおんを忘わすれて。かつす事ことをあらね不実ふじつのありとえて。金をかせずとらり。拙せつけ事ことをためし。ろふ。大方まうほう間ま遠とほふ。うまい物をきつたべて。ろふ物を跡あとでたべる人ひとの不始ふし末まつの也なり。いづと貪ひ乏ひふんぎする人ひとあり。金かせぬもむあり。ととふ。いりて天てんの冥加めい加をあらうたる者もの。ろふ衣服きふをさきつきるやうみい。ろふ物ものをきつたべるやうみい。さす。かやうみい。がけふむ。貪ひ乏ひ致いたせり。のへ人ひともろるべうらず。あるふ大方まうほうの人ひとが。よい着物きものをきつて。さかり。うまい物もののよい。いといふて。きつ。ふ人ひとむかりあり。福德ふく徳のふき苦くるあり。果はた

報むくを取とりて。福德ふく徳を失うふ人ひと也。都すべて貪ひ乏ひ人ひとの仕しうを考かんがへるふ。よい物ものが。ろふをきつ。着きとがり。うまいもの。ろふをきつ。いたがる。是幸抱しんぐうのふき。不始ふし末まつの人ひとあり。又たま。金根きんこんのふ。へ事こと。ろふ。いつも月夜つきよふ米こめの飯いひの氣きふ。ろふ。ろふもきひ。きよもつ。ひて後のちの用よう意いするふ。ま。ろふ。ろふ。不時ふときの入用いりようの時とき。ア。ろふ。質あちをふき。又高利こうりの金きんでもかりて。ろふ。ろふ。ろふ。ろふ。其後そのち入い。ろふ。ろふ。ろふ。ろふ。借金かりきんをかつ。も立たふし。急度きふど幸抱しんぐうあて。かつ。性根しやうこんふ。け。ろふ。金かせ。者もの近きんみ。不実ふじつをあら。と。をかけ。大ひ。と。と。天てんの神かみをふ

逆^{さか}ひて身を^みを^をる^をが^をす^を人^{ひと}也。是^{こゝろ}何^{なん}に^をと^をり^をふ^を。福^{ふく}を^をと^をり^を。
こ^こす^をあ^をふ^をり。何^{なん}で^をも^を今^{けふ}日^ひより^をり^をの^を。明^{あした}日^ひが^を大^{だい}事^じ。今^{けふ}年^{ねん}より^をり^をの^を。
来^{らい}年^{ねん}が^を大^{だい}事^じと^を後^{のち}の^を用^{よう}意^いを^をする^を人^{ひと}で^をあ^をら^をて^をの^を役^{やく}を^を立^たぬ^を。
人^{ひと}あ^をり。何^{なん}で^をも^をよ^をい^を物^{もの}を^をあ^をと^をす^をま^をら^を。こ^ころ^をの^を物^{もの}を^をま^をへ^を。
ま^まを^をあ^をら^をす^をべ^を。左^さも^をも^を天^{てん}の^を冥^{やみ}加^がふ^を叶^はひ^をて^を。福^{ふく}徳^{とく}も^を。
要^いふ^をも^をい^を人^{ひと}あ^をわ^をり^をと^をあ^をる^をべ^を。今^{けふ}は^を彌^や兵^{へい}衛^ゑの^を金^{きん}限^{げん}を^を至^{いた}。
て^を大^{だい}切^きに^をする^を男^{おとこ}あ^をり。金^{きん}だ^をん^をも^をよ^をり。至^{いた}し^を入^いる^をふ^をの^を水^{みづ}を^を。
ま^まひ^を其^{その}上^{うへ}に^をて^を。だ^をし^をい^をま^をする^をあ^をり。是^{こゝろ}も^をむ^をあ^をり^を命^{いのち}を^を。
二^{ふた}番^{ばん}目^めの^を大^{だい}事^じの^を金^{きん}限^{げん}を^をま^をを^を左^さも^をあ^をら^をる^をべ^をき^を苦^{くる}也^{なり}。こ^こを^をを^を。
麻^あ未^みに^をする^を道^{みち}理^りあ^をり。あ^をら^を入^いひ^を彌^や兵^{へい}衛^ゑの^を金^{きん}を^を成^{せい}く^をかり^を。

て^をい^をま^をき^をも^をせ^をす。直^{ただ}ふ^をた^をを^をこ^こい^をま^をへ^をし^をら^をん^をだ^をり。彌^や兵^{へい}衛^ゑの^を。
の^をい^をふ^をか^をあ^をら^をす。こ^ころ^を其^{その}金^{きん}の^をい^をふ^を成^{せい}く^を瘡^{そう}あ^をり^を取^とり^をて^をま^を。
ま^まべ^をし^をこ^こい^をふ^をて^を取^と房^ふ。其^{その}後^{のち}の^をい^をま^をら^をる^を入^いる^を貴^き様^{さま}が^をあ^をら^をる^を。
麻^あ未^みに^をする^を人^{ひと}に^をか^をせ^をる^を金^{きん}あ^をり。外^{ほか}に^をあ^をり^をて^をか^をり^をま^をら^をる^を。此^{この}方^{かた}の^を。
の^を金^{きん}の^をい^をふ^をか^をせ^をる^をこ^こい^をふ^をて^をか^をせ^をあ^をん^をど^をと^をい^をふ^を事^{こと}を^を聞^き。
たり。是^{こゝろ}も^を又^{また}あ^をら^をる^を。金^{きん}限^{げん}に^を世^よ界^{かい}の^を一^{ひと}の^を寶^{たから}を^をま^をら^をる^を大^{だい}切^きに^を。
す^をべ^をき^を苦^{くる}也^{なり}。あ^をら^をる^をた^をを^をこ^こい^をま^をへ^をし^を一^{ひと}の^を腰^{こし}に^をあ^をら^をる^を。
る^を杯^{はい}に^を大^{だい}切^きに^をあ^をら^をる^を馬^{うま}麻^あ者^{もの}也^{なり}。是^{こゝろ}も^を大^{だい}切^きに^を肉^{にく}に^を。
こ^ころ^をい^をま^をて^を持^もて^をき^を苦^{くる}也^{なり}。大^{だい}金^{きん}あ^をら^をる^を。朋^{とも}卷^{まき}に^をあ^をら^をる^を。
事^{こと}を^を論^{ろん}あ^をり。金^{きん}の^を持^もち^をあ^をら^をる^を至^{いた}て^を大^{だい}切^きに^をあ^をら^をる^を。若^し持^もち^をあ^をら^をる^を。

いといふことなり。事^か々々。ふつと。事のやうに。お中教や
ふざけり。めー。と。一。所。持。と。是。九。郎。と。さう。お。悪。人。と。直
み。取。と。て。ま。さ。ふ。金。限。入。用。を。よ。く。持。べ。易。に。慢。藏。誨。盗
と。い。ふ。事。あり。け。む。の。藏。の。役。り。を。慢。く。あ。て。置。入。盗。人。
内。の。寶。物。を。取。と。と。誨。る。やう。お。者。也。と。是。は。間。違。ふ。
用。の。惡。種。と。い。ひ。て。盗。を。招。く。事。あり。を。得。る。べ。い。
ある。人。の。い。ら。い。金。を。か。り。て。請。取。て。甚。ど。よ。ろ。こ。ぶ。人
あり。け。入。の。借。金。を。い。ま。り。苦。み。せ。ず。あ。て。か。へ。さ。ぬ。人
あり。又。金。を。か。り。て。請。取。て。か。り。る。み。か。り。と。け。き。た。い。と。
あ。て。か。へ。さ。ん。と。案。事。を。よ。て。持。引。人。の。借。金。を。苦。み。あ。

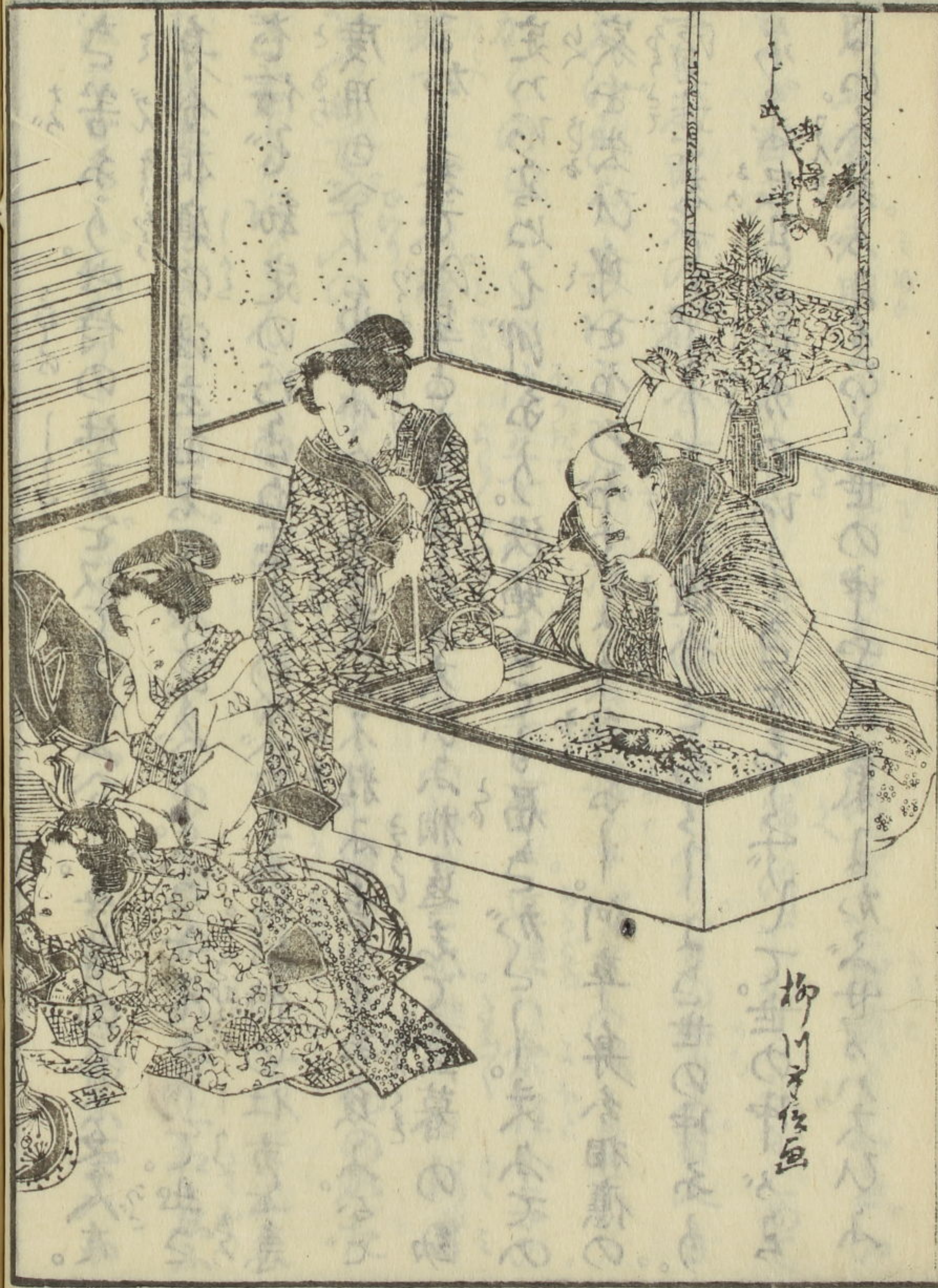
て。か。つ。と。人。あり。か。り。る。み。か。り。と。け。き。た。何。卒。首。尾
結。つ。た。さ。り。の。あ。り。と。を。み。う。け。て。か。へ。す。人。あり。
初。め。よ。か。り。と。人。の。金。を。か。り。と。富。で。も。取。と。さ。う。ふ
思。ひ。を。あ。る。ん。で。か。つ。と。事。の。あ。る。ぬ。人。也。又。後。の。金
を。う。り。た。る。人。の。隨。分。と。篤。実。の。人。あり。か。り。か。せ。の
相。談。を。あ。て。も。よ。ろ。く。か。へ。べ。い。又。初。め。よ。り。か。へ。さ。ぬ
氣。で。か。り。る。人。あり。か。り。と。す。き。を。集。ふ。と。さ。う。ふ。あ。ふ
人。あり。甚。く。せ。た。い。か。あ。る。ま。い。事。を。か。り。の。み。て。人
を。だ。ま。す。不。実。者。あり。又。あ。て。油。断。す。べ。う。と。む。取。合。へ
か。つ。た。若。し。人。の。金。を。か。さ。バ。測。川。一。投。也。も。同。前。あり。

若かこ誦めあゝぬ事いふ。進上と書てのしを分て
をさすべし。又いまりあやまてかりよ来る人も
かへふりのさる人あり。いづともあても。金を持て
る者人く。此事を考へあふぬし。世に若くは
○お身上持といふも。其様ふおき。鋪事よもいふす。唯入
を量りて。出さむ。いまり天面遠い。いふべし。ふ入
より入る方が。まきさふ。初定のいふぬ。苦也。是よりハ
入るまゝ。出す事ハ。少あさ。いふすべし。又左様ふ。あり
が。こしといふ人。いふつ。けり。あり。我より。小身上の者
こつ。通と。いふす。をえて。ハ。左様ふ。あり。ぬ。といふ。ハ。おあり

とせいーす
渡世ハ仕様ふ。いふて。お安く。出来る。者あり。ふ。と。いふ
お。思ふ。ハ。其仕様。いふ。事。と。あゝ。ぬ。あり。我。様。い。い。と。く。
い。國。の。法。家。中。何。某。不。あ。の。難。ふ。て。浪。人。あ。け。る。が。親。子。三。
人。京。都。ふ。お。あ。る。町。人。と。い。は。り。と。あ。て。尋。福。来。り。け。せ。い。
浪。人。の。身。と。い。ふ。一。日。を。還。る。途。き。畜。一。も。あ。く。ま。う。て。是。近。
何。つ。渡。世。の。事。と。覺。へ。た。る。事。あ。し。何。ら。年。以。の。意。意。
ふ。何。ぞ。家。業。よ。も。取。付。け。る。や。う。ふ。頼。入。と。申。し。け。と。む。
亭。主。用。て。あ。る。や。ど。兼。知。い。い。たり。併。し。何。ぞ。家。業。の。
た。し。ふ。も。あ。る。事。と。あ。り。お。い。ふ。や。と。た。け。誦。け。と。い。ふ。漸。く。
本。綿。糸。を。つ。る。事。の。と。覺。へ。た。り。とい。ひ。け。と。む。町。家。の。亭。

主を叩いていふも先當分夫もあるべしと上京してうら
 借屋の下直あるをかりうけ。夫より二人居て渡世を初め
 ける然れども不とき職由三人にて墮ふと精出して一日
 ふ浅九拾文半りりふけるが此後入つまいく渡世の
 定規を定めける。宿賃月々二百文け浅一日は十文宛采一
 日ふ五拾文油炭薪と代等ふ三拾文宛九かくのごとく
 毎日の算用ふまで暮しけるが。元來侍の景な朝も湯
 ふては水をきひけるが先金ふて湯をふかき親父をひ終
 けて其湯はすこしこし添て母娘兩人つらい。其右の湯の
 釜へ直ふかゆをあらうけ。二人の朝飯と一其釜の下ふ炭一ッ結

埋置て釜の何たぐまりのさめざるやうふふんとあてかく
 のごとくこまかふむを用ひけむを五文が炭にて一日
 ゆうくありけるとふん。其余の悉くあるすまいとまはつ
 ず。以外の事へ推て思ひあるべし。叔父も家職を覚へて
 上ふふり。後ふり二人ふから組物を抄習ひ大分しき職
 人とおひて。家も表店へかりうへ格く一日は百文宛りふける
 やうふふり。亦た家法へ前のごとく。一日のりふけふ
 て一日の入用ふ割舟置ありぬいとまふ入。身が相應の物
 見用帳ふりも。ゆるしける。是も格く一日は百文をりふけご
 ことを格むぬと。いふ法を立けり。然れども用帳へふりなく



柳川氏画



餅ついで七五三の月で正月は
ゆるりとすゝめ常の始末ぞ
常の家の業も終えて正月の
親子兄弟も揃ひ居る所

此事をよく表れて居て世の中の風俗よへかまらぬあり
 愚者入世の中の風俗くとりつけまた若家を失ひ身
 をろろろ。飯米小きひのふし時ふへ世の中の風俗
 が助けてくまらるや否や養ひたり。一棧一粒も助けてく
 まへせまい。あくら世の中の風俗よおけんでへふりがと
 へ。何でも身分相應の所をよく表れて。らが身緒の取
 づけるやうふすべ。是肝要の事也。何ぞ世間の風俗よふ
 けまんや。又大家やと世間の風俗ようくらず序先祖より
 の家風をもちり道理至極の道を好ひあふ盛。世の中の
 風俗くといふていひつけする。愚者不智のけ上あり。

あるべし。係あつし苦勞くろうを久疎ひさしくすことを成なりく。の樂たのしみをハあ
また苦勞くろうありし樂たのしみといふ事ハ成なりてふき事也。歌
ふ。樂たのしみといふ物ハ年中わんぢう苦勞くろうをてをむし。其内うちの休やすみ
よどあるといふ。是ハ間遠まんとふし。一切いっけつの人年中ねんぢう苦勞くろうをて
家業かぎふをよくつとむきを樂たのしみといふ者ハ其中そのうちより少すくく
なり。是ハ識しの樂たのしみといふ。け外けは樂たのしみといふ物ハふきことあ
るべし。此外そより求めて樂たのしみをむ。樂たのしみといふはけり。す。あて
跡あとして直ぢきふ大苦だいといふ。け外けは賢人けんじん君子くんしハ樂たのしみを求め
ふらず。唯ただよく身みを脩しゆめ家かを齊せい一國いつこくを治ちむると樂たのしみとい
ふ。酒さけ事こと振興しんかう杯はいハ少すくくも樂たのしみといふ。唯ただ無事むじを

樂たのしみといふ。愚者ぐしやハ樂たのしみを求めて樂たのしみむ。後のちハ大
苦患くげんを受うる也。又年中ねんぢう苦勞くろうをて家業かぎふを出精しゅしやうし。儉約けんやく
質素しつそふし。す人ハ大晦日おほみその晚ゆふより早はやく。佛神ぶつじんハ
燈明とうめいといひ。家内かうちをあらう。年越としこしの法飯はふふといひ。
となべる人あり。此人ハ又来年らいねんも安やすふ。すといふ
花はなの咲さたる人あり。又家業かぎふ不精ふしやうをて。けんやくもせ
ず。暮くす人ハ大晦日おほみそハ佛神ぶつじんハ燈明とうめいもいひ。行燈あんどう
もともさず。我家わがやにも居いる事こと一時いときとす。余所よそハ何なにか
く。して居いる人あり。け人ハ又来年らいねんも大だいひ。する。あむと
いふ。ふの咲さたる人あり。い。と。至極しごくといふべし。又年

中家業を出精あて。けんすくよくと人入。実ハ年中
も。一生も安かよくとす人あり。人間の樂とこの入は是
位の事也。是が人間ふ分相違の樂とありけ上の樂とを
求むると直ふ大いある。哭ひのりて大苦痛を受ると
あるべし。何事も中道のよい野を通りあへべし。是善
事ふあて。福德安か。の来る道あり。
○大年ハ常ふことあきつとむき。べし。何れも正月住吉の松
餅ついで。七五三をりて正月を。ゆくりとするハ常の始末ぞ
一生つとめ働ひて死を待ハ福德ののつまる所也。け道理
とよくあつて。身をふさめ家業つとむる事を樂くと

すべし。左ととハ。先祖父父母の恩も報り奉り。且又
ゆ子孫繁昌も其中心ありとあるべし。何事此本を五
度も七度もよくよんで世の中を安かみろくと。夫を
すべし。立身出世をあらがも。貴賤上下たみ。安かよ。以
敵をたべんが為也。其外の名聞威勢ハ末の事也。この
道理をよくあつて。ゆ敵さ。安かよ。たべらまると。其
外の事ハ運ふ任せ。とろく。とろく。とべし。無理ふ全根
をろく。がる。よ。及むす。無理ふ出世する。よ。お。よ。む。ぬ。唯家
業を出精あて。仁義忠孝。儉遜を専らふす。是
ぞ。誠の福入聖賢といふべし。

日用心法鈔三編下大尾

因ふあるす。身を治め家を齊つるとりふ内ふも随介
 と後生を預ひ以念佛を申しあふべし。家を齊つておきて
 中途ふて死する人あり。後生預ふ事あり。子供の時ふ
 ぬけたき者也。何時死せんもあまがごとし。急度用
 ぬけつる。あるべし。老若男女たふ常く念佛を申し
 あふべし。是れ人々是非たふ大入用の事あるを若き時
 よりあふかけし喝つあふべし。今あふかけしと未だ
 みて大徳をする事也。あふみて善事の種をまけを未

来ふて一粒の功徳を得るあり。善悪たふ種あふ
 きたる。実る所あり大ひ也。こまに依り。惡をするやと損ある
 物あり。あふむかり惡をまて。大ひある苦患を受ける也。
 又善をするやと徳あふむかり。あふむかり善をまて。大
 大ひある功徳を得る也。然るに愚人の善惡得失がら
 ぬあふ。惡をも悲ます。善をも其様み好まぬ也。智者の
 善惡得失よくあるあふ。惡の大ひは悲ま。善の大ひは好
 んでつよく好む也。是惡のあふむかりまて。大損とあ
 り。善のあふむかりまて。大功徳とあるあふ也。こまに依
 り。惡のあふむせぬあふ。善のあふみて。するやうに致す

べし末に至りては大徳をする事也。今少く後生を預ひ
念仏をせしむ。未だして大善大功德を得る事也。こと
み依り有智無智持戒破戒善人惡人貴賤男女の差
別なくみなかへて念仏をせしむべし。歌ふ
○まろくくみ若き時より後の世を。むよかへし思ひ皆人
務引哥ふも。後生預ひ。若きよりぬ。今の若し先
主とあり。又白樂天が詩ふも。若き者半の土と為といひ
しが。間遠ふ。後生に若年よりむよかへし。又年
老流る。何もかも打捨て。後生を預ひ。念仏をせし
むべし。どうでもどうでも。近い内み死る。かゝる。て。その

用を急度致すべし。家を齊つるといふも。若い内の
事也。年若きは念仏す。身を治め家を齊つるふ
る也。無能上人の和讃みいづく。若きふき業をふり捨
て。目くみ修持の功をつめ。ももや。目くまのたびのそ。せ
川ふもいそげ息をつむ。すふちちいづく。生きたふん。京
九重の花のうてふみと。いふ身の上也。ことよ。いづく。何も
かも打捨て。念佛三昧とあるべし。先の教つる若し若や世を
張てつとむる。虎の事ふり。年若の家業といふ。念仏
ヤスガ。かげうふり。是即ち身を治むるの仕事也。ふよか
けし。唯一向み念佛すべし。老人六哥仙ふ

秘えん經又け哥の通りみ相違ふ。月日入る月とて
 へきて。目なす月と。鼻をかむるみ死るから其用ををふ
 ころべ。けふ人の葬れ明日我身の葬れ。油
 断すべからむ。歎ふ
 ○きのみ見。人へと問むけふ。明日又我も人よと入るん
 ○誰死んどこか死んどこへ内。我が死んどこ人みいこる
 ○悲ろや。西も東も皆無常。迷道たのめ。弥陀の浄土へ
 是等の哥のふをよくま。急度後生を預ひ。念佛
 をや。みへ。世に悲ろま。物といへ。死の一事ふり
 死のつが。ちよ富貴も立身も役。立ぬお角。世あて。

ち。人の用ひもよく。あ。と。を。年。が。あ。て。直
 み死で仕。人。間の。世。と。い。へ。雪。で。人。形。を。作。と。す。者
 あり。あ。い。う。う。み。あ。と。直。と。さ。い。仕。と。い。世。あ。こ。み
 よけ。と。死。る。近。く。あ。る。み。と。ま。る。世。す。り。も。家。督。相。續
 す。も。死。番。が。當。と。す。り。の。也。あ。ま。り。悦。み。へ。さ。事。み。あ
 ら。す。直。み。死。る。か。ら。あ。て。人。よ。用。ひ。ら。ま。る。日。入。み。世。み。死。る
 何。と。い。や。も。悲。ろ。ま。き。物。の。あ。し。と。ま。る。べ。い。徳。本。行。者。の。哥。よ
 ○徳。本。ハ。十。方。世。界。ハ。二。人。み。南。無。阿。彌。陀。佛。臆。病。の。一
 ○死。る。事。い。や。み。あ。て。南。無。阿。彌。陀。佛。唱。て。死。あ。ぬ。極。樂。一。切
 唯。死。る。事。い。や。み。あ。て。早。り。居。る。役。よ。立。ぬ。死。る。事。い。や

あつた余仏をやりて再び死ね極樂へ移つてをすべし
 貪乏する事がいやあり身をよくあてて家業をせむ
 すべし貪乏をあげのをかり居ての役みえぬ貪乏がい
 やあり家業をせむすべし移さし世をうつ寒へる氣をい
 ろし是を本とむるといふ死る事がいやあり念ね
 をやりて再び死ね極樂へ移つてをすべし死る事がいや
 あり急度ふみかけの念ねをやりすべし唯いやがけを
 かり居ての役みえぬ是を道とる法をかり移る事がい
 是を本とむるといふ死る事がいやあり我身の大事の後生を預け
 入るし人間に利根あらずで大馬鹿也又たよく志しあつた人

あつた大事の後生をのびくみする欲み
 〇むかふことをいふ死る事がいやあり念ねをやりすべし
 〇死すよりあつた月日をうじと思ひかどむけふもむけ
 〇あつた死る事がいやあり念ねをやりすべし死る事がいやあり
 〇死すといふ死る事がいやあり大事の後生を預けそこへ
 又忙し死る事がいやあり其上服の内は太相あ苦勞もあつてど
 〇後生の所迄いふが届かぬ南無阿彌陀佛といふ声が死ね
 〇死ねといふ捨てて大換をするからいでもがまんをせめてす
 べしがまんをやりて死る事がいやあり念ねをやりすべし死る事がいやあり
 〇死入間とて甲斐がふい関通上人の和讃み淨命頂

御經入おきやう宿世まぐ見諸佛けんしよぶつ。即能信此事すなはちとあり。けふけふ宿世まぐ諸の佛しよぶつ入見奉りあひみほうり。よき善根を致したるをみいま今念仏を信しんト唱へな極樂ごくらくへ往生すといふ事也。ありがごとく存トて念仏を出だ持すべし。まも身や心を清浄しやうじやうみ志てせ。がんがんの念忘ねんわう念ねんを成なりしすも起おこすふとあるを仕方しほうもあはれ唯ただ生うまふがうつくろつくろとすある。南無阿彌陀仏なまあみだぶつとすむよりあり。無能上人むねうじんの哥うたふうたふ。罪科つみとがもまたまかへりえど時声よぶこへととあり。いとちみとけま濁にごる世よの捨ぬ誓ちかひを其終そのまうみたまけふとすをかりぞ忘念わんねんがんの念ねんもかへりえず。唯一向いつこう念仏すべし。決定けつじやう往生

疑うたがひあり念仏ねんぶつ入法所具やうふしよぐといひて。善人ぜんじん惡人あくじんみ入みかまふかまふ疑うたがひあり念仏ねんぶつ入法所具やうふしよぐといひて。善人ぜんじん惡人あくじんみ入みかまふかまふ唯ただス者ものを極樂ごくらくへつと行所やうしよの徳とくを備そなへ居いる。是こみ依よてス者もの入皆極樂ごくらく往生おうじやうす也。たとへて金壹兩きんいつりやう入誰たれが持もても六十目むそく様の序持やうのしよぢふさまで。六十目の通用つうよう。百姓町人ひやくしやうぢやうじん子供こどもを食くふ持もても六十目むそく成なりしすもあとりまふし。錦にしきみ色いろんで。少すこしもふところまふし。是こみ小判せうはんふ其徳そのとくを具そなへ居いて持人ぢにんの善惡ぜんあく上下じやうげみ入みかまふかまふ今いま念仏ねんぶつもかくの通りとおり。善人ぜんじんがやして極樂ごくらく往生おうじやう。惡人あくじんがやして極樂ごくらく往生おうじやう。元祖大師げんそだいしでも徳本とくほん行者ぎやうでも。在家さいけの惡人あくじん男女なんにょがやして極樂ごくらく往生おうじやう誰たれがやして。少すこしもふところ

まゝし。是を法所具の徳とて。善人悪人入るまゝ。唯
 ナス者を施樂つて。所の法をそふく居る。小判入
 六十圓の徳が備へて居る。入持人の善悪入るまゝ。誰
 が持ても。六貫八百の働き。文もふとりまゝ。貴賤上
 下。かまらぬ。唯持て居る人の自由とある。念仏も又
 かくのごとく。善人悪人入るまゝ。唯ナスを施樂へ連
 所の法を備へて居る。是も依てナス。どの人へ皆施樂へ
 往生する也。是を法所具の徳といふ。たとへば酒をのんだら
 善人悪人子供成人の差別あり。皆酔ふ酒入るまゝ。所
 の法をそふく居る。巴豆入る下る所の法をそふく居る。

のんどう。善人悪人貴賤男女子供成人の差別あり。下
 る。巴豆入る下る所の法を備へて居る。是を法所具といふ。
 又念仏もかくのごとく。唯ナス者皆極樂へ往生する所
 の法が具へて居る。念佛といふ舟の施樂往生也。酒を
 呑み酔ふといふ。巴豆をのめば浮るがといふ。唐かじとて
 む辛ひがといふ。念仏やせば施樂往生がといふ也。善人
 悪人子供成人の差別あり。唯南無阿彌陀佛とナス者ハ
 皆施樂往生する也。誠ふり。がご念仏とあるべし。悪人九
 十の身入取て。他力本願の念佛など。ありがごきりの
 ゐきとあるべし。佛法中最第一の功德あり。

○花嚴經いよく我佛法三昧海中於て唯一行を知
る所謂念佛三昧也。念仏のありかたき事をよく知る
べし。成等正覺者て真最妙の花嚴經い念仏の一行
餘りみ勝きたる事を説く。文殊が三つに諸くの修行
門の中念仏よるたる法門あり。弥陀の本願不可思議
ふ者て定極樂に往生すと法照禪師み教へる涅槃
經いよく五百塵點劫の修行の西方の往生いよく八
万四千の法門の阿彌陀の三字に據すとける釋尊五百
塵點劫の修行の功德に念佛を申し。西方の往生を預
入ふもずりて仏とありき。八万四千の經文の功德に阿

彌陀の三字に據るを是を唱へる者。大善大功德を得
る安くと極樂に往生すとける事也。初め花嚴經に
終り涅槃經に至る迄弥陀の念仏のありかたき事を説
く。是を澄圓が三つに勝論八いよく。無勝淨土淨
瑠璃世尊等へ更み勧誘の言無然る。西方淨土に二代四
十九年三百六十余會の説法に皆阿彌陀の行願を説
く事あり。所以に妙樂大師に諸經所説多主弥陀と判
ずとありける。無勝淨土といふに釋尊の淨土也。淨瑠璃
世尊といふに藥師の淨土也。我淨土（來と）た藥師の淨
土（ゆけ）た仰らとす。唯念佛を唱へる彌陀の淨土（ゆ

けつと初めよ。四十九年三百六十余座の說法よ。弥陀
の本願を説て念仏を勧めよと云ふ事あり。けふは法花經
の修行者妙樂大師も諸經の中より彌陀佛の事
をこそす物のふいよと云ふ。余行余善。目をかけず。念仏の二
方を修行をべし。弘法大師十無益詠の第一よ。
○一向ふ南無阿彌陀佛の上へ。諸善万行無益也。けり
○二ふく頼めばと云ふ。弥陀仏をふと云ふこと無益也。けり
○八まんの寶藏をある智恵ありと云ふ。弥陀頼ますば無益也。けり
○十惡も五逆も滅す。何と云ふ。外のに修行むるさふりけり

かみうふ哥十首のりく皆念仏のありがごとき事をやめ
ありあり又弘法大師八十八ヶ所極樂寺の歌よ
○西方の弥陀の浄土へ。けんふり。南無ありと云ふを口くせみせよ
け弘法大師の御哥もて念仏の大善大功德をあるを
無能上人の御哥よ
○聞きこふも罪つみのやろぶる。即名ふをばし。く唱となふる人の身の上
聞きこくさ罪つみがやろぶる。いんや唱となふる人ハ猶罪障消滅志
て極樂に往生すといふ事也
○元祖大師の御傳ふ菜摘水汲草かりのたぐひ。内外た
みかけて一文不通ある者も。唯南無阿彌陀佛くと云ふを

かりみて極樂往生すとの云へり。是觀經下三品の云は
通りあり誠みありがとき念佛也。云うけくしよ
べし。末世の凡夫。拖重惡人の阿彌陀佛より外に助けあ
ふとけし佛もあらず。諸宗多けきた無智惡人の助る宗
旨一宗もあらず。唯淨土の二門南無阿彌陀佛の一也。其
外の宗旨は皆自力難行道なり。云のもちやう修行
の仕やうの別て云々。云々。凡夫の云ふのりがごと
し。諸佛多けきた。皆有智の善人をよりを助けあふ。無智
の惡人を助けあふ佛一佛もあらず。無智の惡人を安くと
助けあふ唯阿彌陀佛むかり也。是に依るは念佛の一法

と信を修行住座卧し唱へるべし。又南岳天台等の法
花經修持の門人も。得宗の悟りを明く永明禪師等も皆
念佛を唱へて彌陀の淨土に往生しあふ。能くありがとき
念佛とある也。
○元照律師彌陀經要解あり。云々。南無阿彌陀佛と唱へる
は。花嚴の奧藏法苑の秘髓諸佛の必要菩薩の方便亦是
楞嚴の密意ありとあり。造罪の凡夫容易に成佛する事
ハ。八万四千の經文あり。唯淨土の觀經下三品あり。のこ
る。其外の經文あり。觀經下三品に至るハ。五逆十惡の罪人
地獄の猛火火の車の現みあり。云々。云々。を見く。云々。云々。

より外そとに助たすける道みちふさかぬ也。智者の善入よきいりハ何家なんけふくも
成佛ぶつじょうすけふた愚者ぐしゃの悪入あくいりハ外そとに成佛ぶつじょうの道みちふくとも
べし。惠心けしんの極重悪人の文ぶんを能く考ふべし。

南無阿彌陀佛

天保十一子八月吉祥日

東都下谷金杉

壽福軒述



日用心注鈔初編 三冊 主従心得草初編二編
同 二編 三冊 三編四編五編也
同 三編 三冊 八部十九冊皆出板

